

鎌倉婦人子供会館の 理事長に就任した

よこまつ さちこ
横松 佐智子さん

ひと



ン」を学び、1級建築士に。40歳の時に、夫の親類が多く住む湘南にと、鎌倉に居を構えた。

会社と家の往復で鎌倉を知らなすぎる、と思い始めていた2001年、

神奈川県立近代美術館の保全問題でも活躍した。市民の署名運動の先頭に立ち、戦後日本のモダニズム建築の傑作を鎌倉文華館として残すことに成功した。

カルチャーセンターとして70年近く親しまれている小町の鎌倉婦人子供会館の理事長にこのほど就任した。

建築家として会館建物の改築改修事業の責任者となり、役員も長年務めてきた。「かまくら女性史の会」会長でもある。コロナ禍を逆手に、新しい試みに着手している。そのひとつがクラシック音楽コンサート。コロナで困っている新進演奏

家に活躍の場を提供すると同時に、会館としても「質の高い音楽を市民に身近に楽しんでほしい」と、湘南クラシックアーツ・テイストパラダイスと共催する。9月12日と12月5日に会館内のホールで開かれる。(3面に紹介)

もうひとつは、オンライン化。遠くに転居して通うことが難しくなったり、コロナで外出を控えるようになったりした人とのつながりが維持できるようにとウェブ環境を整えた。

千葉県佐倉市に生まれ育った。日本女子大で「暮らしの中の建築デザイン

鎌倉市の広報に「女性史編さん員募集」の記事を見つけ、早速申し込んだ。そこで編さんを担当、聞き取りをしたのが当時の会館理事長、副理事長だった。「これが会館との最初の縁」。その後、会館に建て替え問題が持ち上がり、「建築家でしょ。手伝って」と頼まれ、役員を引き受けた。内部のさまざま意見を取りまとめ、プライベート感と公共性を両立させた改築は「彼女でなければできなかった」との評価を得ている。鶴岡八幡宮にあった旧

鎌倉婦人子供会館は戦後間もなく「婦人に教養を、子どもに学ぶ場所を」と女性たちが立ち上がった設立し、今に至るまで女性が主体となって運営する。「特筆すべき誇り」と胸を張る。「35人の役員一人一人が手弁当で大事な役割を担っている。それだけに、そろそろ世代交代も考えなければ」と真剣な面持ちで語る。

長谷の自宅に個人設計事務所を開いている。夫と2人暮らし。趣味は水泳と油絵。75歳。

(文・写真 三浦準司)